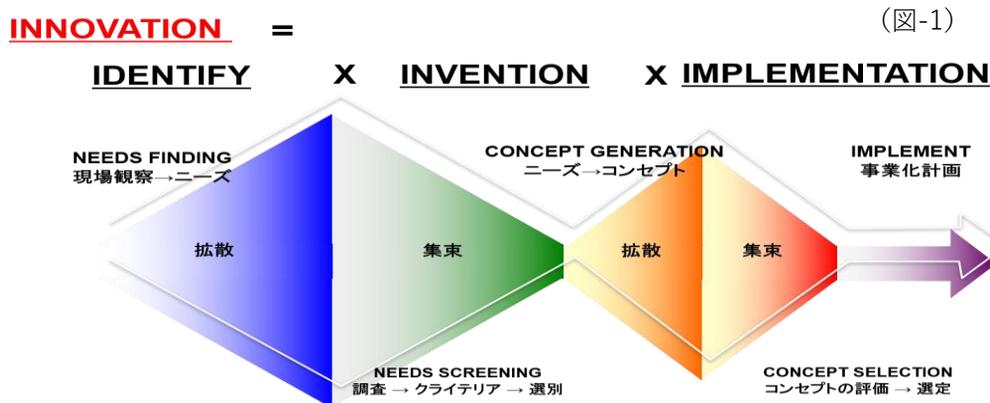


# 令和元年度 医療機器開発イノベーション人材育成プログラム

## ～ 最終報告に際して ～

今年度で第3回目を迎える本プログラムですが、今回は、米国スタンフォード大学で創出された医療機器イノベーションリーダー人材育成プログラムとして世界的にも高い評価を得ているバイオデザイン手法を、東京都の中小ものづくり企業からの受講者を主な対象として、実際の医療現場観察実習も交えたワークショップ形式で学ぶプログラム構成で実施しました。



このバイオデザイン手法は、徹底した現場観察とそこから得られた現場の課題（ニーズ）に基づくNeeds-drivenのプロセスを特徴としています（図-1）。今回は、東北大学附属病院に現場観察先としてご協力頂き、2チームによるプロジェクト形式で、グループワークを中心に全11回のプログラムとして進めてきました（第12回：最終報告会は新型コロナウイルス対策の為、代替措置として公表用資料を作成しHP上で公表）。



(中尾浩治様による講義)



(池野文昭先生による講義)



(グループワーク)

この人材育成事業としては、バイオデザインの「プロジェクトのリスクを下げるために仮説検証を進めていくフレームワーク」を受講者の皆さんに学んで頂くことに主眼を置いて実施致しました。最終報告書はそのフレームワークに従い、下記の構成要素で纏められています。

- ◆ 観察結果～得られた課題
- ◆ ニードステートメント
- ◆ 病態・疾患機序
- ◆ 疫学・市場規模
- ◆ 既存の治療法～ギャップ分析
- ◆ ステークホルダー分析
- ◆ ニードクライテリア（満たすべき要件）
- ◆ コンセプトとラピッド・プロトタイプ
- ◆ ビジネスプラン
- ◆ 開発年次計画

今回、最終報告として各チームが取り纏めたプロジェクト内容は、実際の医療現場観察から得られた素材をベースとしつつも、限られた時間内で作成された現状の仮説であり、実際の医療機器開発プロジェクトとしては今後も更なる深堀の検討や修正が必要とされるものですが、短時間とは言えバイオデザインの特徴的なフレームワークに従ってしっかりと纏め上げられた最終報告となっています。

業務で多忙を極める中にご参加頂いた受講生の皆さんにとっては、今後のご自身の医療機器開発業務や目指す事業への取り組みに於いて貴重な経験と知見を得る機会であり、皆さんの一層の活躍の一助となり得たことを期待しています。